



# 近江の神像画

滋賀県立近代美術館  
館長 石丸 正運

神像画は崇敬の対象とする神の姿を絵画に表したもので、わが国においては本地垂迹説にともなう曼荼羅のかたちで描かれることが多いと言えます。本地垂迹というのは仏や菩薩が、衆生をすくうために仮の姿をとって現れることをいいます。つまり、わが国の神は本地である仏・菩薩が人々を救済するため姿を変えて迹を垂れたものとする神仏同体の説です。神は仏が権りの姿で現れること、權現というわけです。これは神仏混淆、神仏習合の思想に支えられたものです。

わが国固有の神の信仰と渡來した仏教信仰とを折衷して融合調和する考えを表しています。それは奈良時代に始まり、平安時代を経て、鎌倉時代から、室町時代にかけて、最も盛んとなり、遺品も多くなります。そして神仏分離、すなわち、慶應4年（1868）3月に維新政府が祭政一致の方針に基づき、神仏習合を禁止した時点までつづきます。

わが国の神像画は多く曼荼図のかたちで描かれていますが、曼荼羅は梵語からきている言葉で、諸尊の悟りの世界を象徴するものとして、一定の方式に基づいて、神々やその本地の仏や菩薩を網羅して描いた図であります。

神像画の遺例は平安時代に始まりますが、鏡面に線刻で描かれた御正体や神社本殿扉絵などを除き、ほとんど鎌倉時代以降のものです。

さて、滋賀県における神像画は、その多くは比叡山の守護神とされる日吉神社の神々を描いた山王曼荼羅図であります。

滋賀県は県土の中央部に広大な琵琶湖をようし、周囲は緑豊かな山々により取りかこま

れ、山々から流れでる河川は各地に肥沃な耕地を展開させています。本来的にその地で育まれたということでは、県内には京都、奈良についての数多くの国指定の文化財を保有しています。

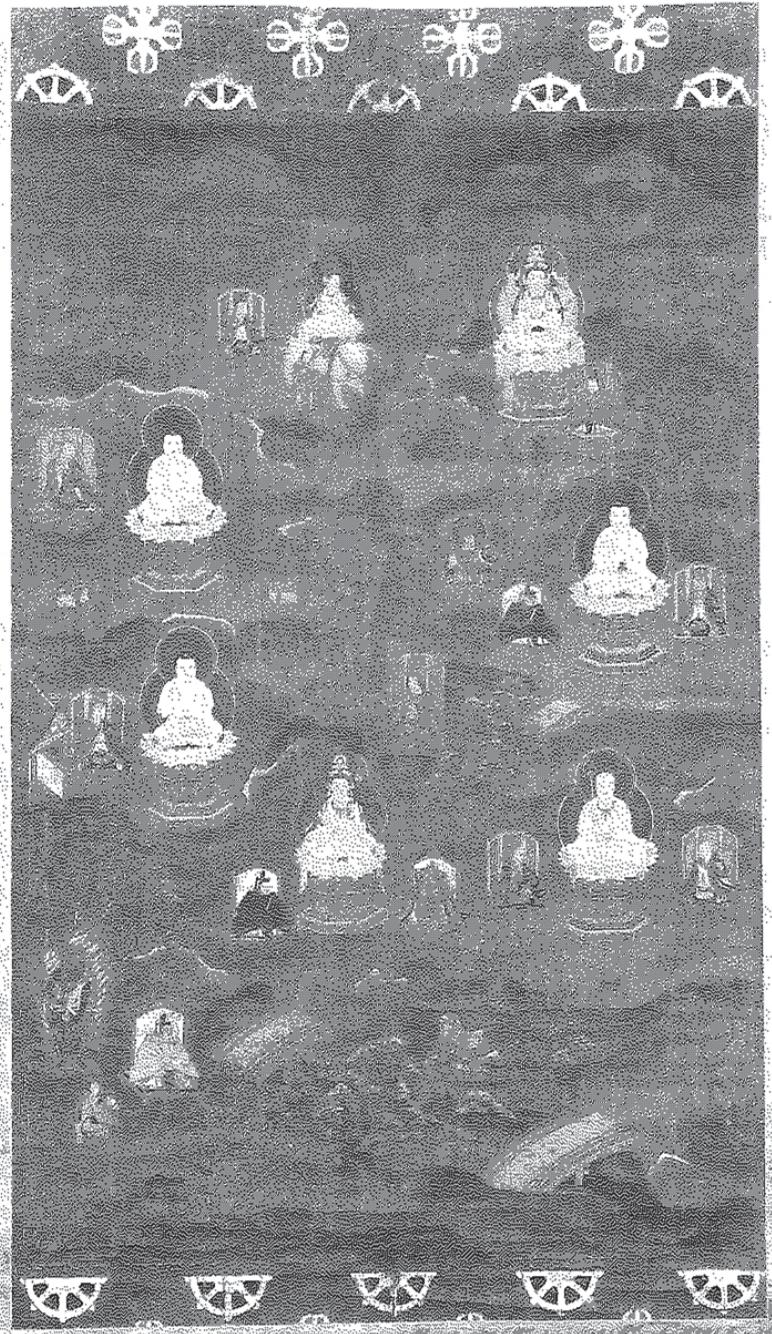
湖と森の国・近江（滋賀県の古称）にふさわしく、文化財の中でも寺院建築、神社建築、仏像彫刻、神像彫刻にすぐれた遺品が豊富にあります。その意味では神像彫刻にくらべて神像画は必ずしも豊富にあるとはいえないかもしれません。しかし、日吉山王曼荼羅系の神像画や多賀曼荼羅など、近江の神々を図示したもの。天台宗関係の渡唐した高僧が守護神として将来した神の画像などは近江に生まれた神像画ということができます。

わが国で神像画といえば、熊野曼荼羅、春日曼荼羅などは有名なものであり、遺品も数多く伝えられていますが、山王曼荼羅もそれらに劣らずすぐれた遺品が伝存されています。とくに地元である滋賀県内の天台系寺院に保持されていています。これには天台寺院で行われます宗教行事に必要なものであったこともあります。

まず、近江の神像画として遺品も多く、指定物件の数でも圧倒的に多い山王曼荼羅について見ることにします。

山王曼荼羅は比叡山と天台宗の守護神として、比叡山の東のふもとにある日吉大社でまつられ、信仰されてきた神々を描いたものです。

神像画としての山王曼荼羅は大きく二種類に分けることができます。一つは日吉大社の神域の風景をふんだんに描くもので、その中



重要文化財 絹本着色日吉山王神像 143.5×76.5  
鎌倉時代（愛東町 百済寺）

に神体山である八王子山(牛尾山)、社殿をはじめ社域の構造物を登場させています。自然の景観が重要視されている浄土教様なもので、山王宮曼荼羅といわれます。もう一つは、密教様の曼荼羅で山王本地仏曼荼羅、山王垂迹曼荼羅などといわれるものです。

宮曼荼羅系のものとして、湖東三山の一つ百済寺に所蔵されている「日吉山王神像」があります。絹地に彩色されたもので国指定の重要文化財、鎌倉時代に制作されたものです。

緑濃い豊かな自然美の社域に山王上七社の本地仏がそれぞれ中七社、下七社の諸神を伴っているかたちで描かれています。

画面には上方から神体山である八王子山をはじめ、現在は石造橋となっていますが、この図が描かれた当時のまま、朱塗りの橋には擬宝珠高欄のついたいわゆる日吉三橋が大宮川の清流にかけられています。うつそうと生い茂る樹木はゆうすいな神域を表現しています。

画中には山王神のお使いをする神猿も描かれています。上七社の神は仏・菩薩の姿で、それに寄り添うように描かれている中・下社の諸像は垂迹形の神影像です。神域の美しい自然の中に浮かぶように配置されている諸仏、諸神は全部で21を数えることができますので、この図には山王二十一社の諸神が登場しています。

描かれてから700年以上を経た神像画ですが、まことにきれいなものであります。

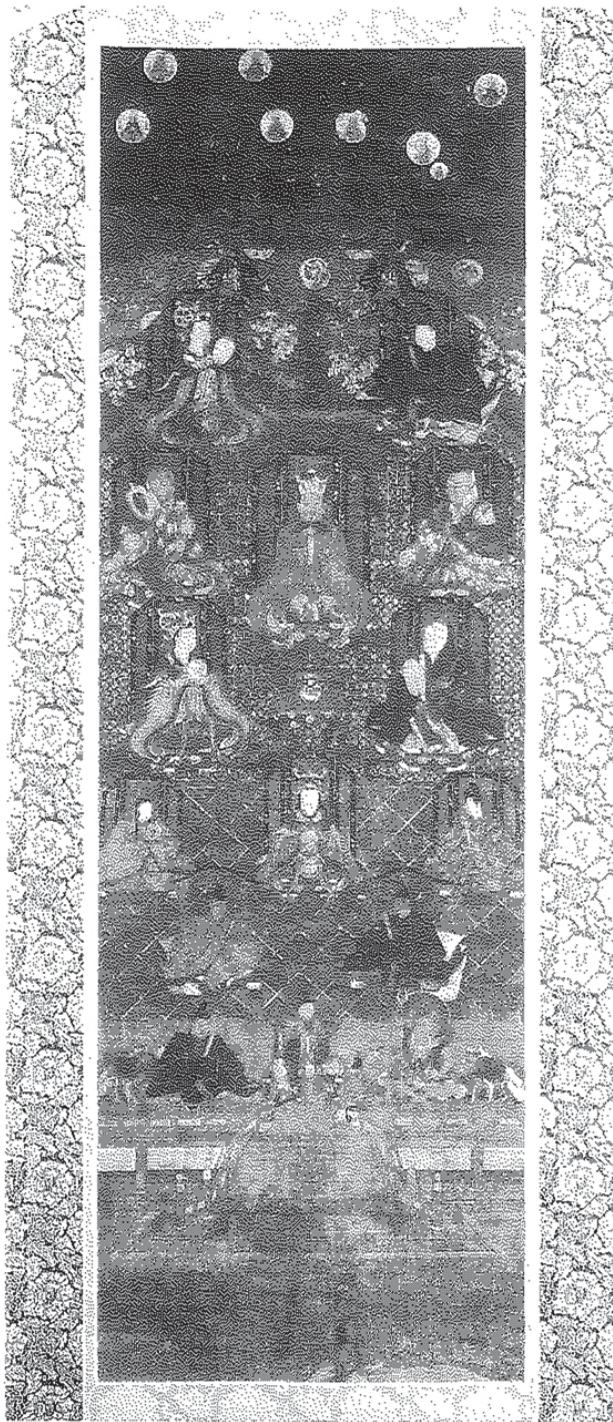
岩絵具の緑青で彩られた樹木の枝葉、朱色の鮮やかな橋の高欄、群青の清流などが神域の景観を見事に現していて、その中に大きく描かれた上七社の本地仏は金泥の仏身に切金の文様で文字通り、神々しく表され

ています。

この百済寺所蔵の「日吉山王神像」は県内にあります神像画の中でも、もっとも美しいものの一つです。

もう一方の密教様の山王曼荼羅としては、大津市坂本にある西教寺所蔵の「山王諸神像」をあげることができます。やはり国指定の重要文化財で鎌倉時代の制作です。

画面には百済寺の山王像と異なって、自然の風景は描かれていません。全体を社殿にみ



重要文化財 絹本着色山王諸神像 124.5×40.0  
鎌倉時代（大津市 西教寺）

たてて、そこに山王の諸像が垂迹の神影像で描かれています。画面の上の方に山王七社の神々が三曲屏を背にして、<sup>まいばん</sup>礼盤上に坐っている姿で表されています。男神は東帶（平安時代以降、天皇および文武百官が朝庭の公式行事の際に着た、正式の服装をいいます。）姿や、唐装、僧形にあらされていて、女神はおおむね中国風の姿であります。その下方に中



重要文化財絹本着色山王権現像 136.0×56.5  
鎌倉時代（安土町 浄巌院）

七社の神と考えられる諸像を配置しています。

この画像の特色は最上部に上七社の本地仏が七星の中に描かれていることです。七社の神と北斗七星の信仰的つながりを示すものであります。もう一つ、やはり密教様のものに安土町淨巌院の「山王権現像」があります。絹地に彩色で描かれたもので、制作は鎌倉時代。画面全体の構図などは西教寺の画像と同じ傾向が認められます。ただ細部を見て

みますと少し違っています。各神像が垂迹の姿で描かれているのは同じですが、下方の回廊には狛犬で左右をかためた中央部に、3人の高僧が描かれています。その姿かたち、顔付きから、右から慈覚大師(円仁)、伝教大師(最澄)、慈恵大師(良源)の像と思われます。山王諸神と比叡山天台宗の高僧の間柄を示すものとして興味深いものです。

ここで、これらの山王曼荼羅に描かれている山王諸神について少し説明をしておきます。

山王曼荼羅の遺品の説明の中でも一部ふれましたが、比叡山の東麓に美しい形の八王子山(牛尾山)があり、山頂近くには磐座とされる巨石が在って、神体山とされ、そのふもとの日吉大社のあたりには古墳時代後期の群集墳で占められています。このことから古代より原始信仰のかたちで周辺の人々から厚くうやまわれた山ということができます。

八王子山に鎮座する神については『古事記』おおやまぐいのかみの上巻に記されています。「大山咋神、亦の名やまとえのおほぬしおのかみは山末之大主神、此の神は近淡海國の日枝の山に坐し、また葛野の松尾に坐して、鳴鏑ひえいざんをも用つ神」とあります。ここで日枝山というのは八王子山を指しています。山王上七社を構成する神々は東本宮と西本宮の二つのグループに分かれています。東本宮のグループは四社で、土着の地主神であります。大山咋神で、旧称二宮にのみや(小比叡)、本地は薬師如来、現社名東本宮といいます。東本宮を中心に、大山咋神の妻神とされる鴨玉依姫神、旧称は十禅寺、本地は地蔵菩薩、現社名樹下神社とこの二神の荒魂をまつる八王子山上の八王子、本地は千手観音、現社名は牛尾神社、それに旧称三宮、本地は普賢菩薩または大日如来、現社名三宮神社の四つの社であります。

これに対して西本宮グループは八王子山の南麓にまつられた神で三社からなります。中心になるのは大己貴神で天智天皇が大津宮を造営したころに、大和の三輪山から勧請されています。大己貴神は『古事記』に「大國主

神、亦の名は天穴牟遲神」とあるように、国作りの神として知られる大国主神のことであります。西本宮の祭神は大富大権現といわれ、大山咋神が小比叡神といわれるのに対し、大比叡神と呼ばれ、文字通り山王諸神の大黒柱であります。

大己貴神、旧称大宮、本地仏は釈迦如来・現社名は西本宮でありますが、それと九州宇佐宮より勧請された神で、祭神名田心姫命。たごりひめのみこと旧称は聖真子、本地は阿彌陀如来で現社名は宇佐宮であります。それともう一つ、比叡山とも深い関係にある白山神を迎えていきます。

すなわち、祭神は白山姫神、旧称は客人、本地仏は十一面觀音菩薩で、現社名は白山姫神社であります。この三神により西本宮が構成されています。

地主神としての東本宮グループと勧請された神々による西本宮グループ、合わせて、山王七社が成立しています。主要な上七社にそれぞれ摂社、末社グループが追加され山王二十一社が成立しています。

平安時代のはじめ、比叡山寺を山上に建立して、天台宗を拓いた最澄は先住の守護神として土着の二宮と勧請されていた大宮を崇敬したし、その後継者も、天台一山の守護神として山王諸神を敬い、天台の宗教儀礼には山王曼荼羅の神像画や彫像が用いられたことがわかります。特に中世期に入ると、神仏習合の思想は一段と隆盛を見るようになって、山王神像も数多く制作されるようになったといえます。

特に近江国は天台王国であったこともありまして、山王神の画像である山王曼荼羅図が多く残されることになったと考えることができます。

山王曼荼羅としては既に述べました三幅のほかに、重文、絹本着色、山王本地仏像 1幅、南北朝時代、大津市延暦寺 県指定文化財 絹本着色 日吉山王曼荼羅 1幅 南北朝 余呉町正源寺、をはじめ数多くの山王画

像が県内の天台宗寺院を中心に伝えられています。

つぎに、中国へ渡った天台の高僧が帰国に際し、勧請した神々があります。なかでもすぐれた遺品があるのは新羅明神の画像であります。大津市園城寺の所蔵になります重要文化財 新羅明神像、1幅は鎌倉時代の制作で国の重要文化財に指定されています。画面中央に唐装で右ななめを向いて左足をたれ、右あしを屈げて椅子に腰掛ける姿で描かれています。また、明神の左右下には衣冠束帶で勿を持った地主神火御子と般若菩薩と宿王菩薩をしたがえています。また、明神の頭上には円中に本地仏である文殊菩薩を描いています。明神は口を開いたそう身の老人の相で右手には文殊菩薩であることを表す経巻を持っています。左手には錫杖を持つ姿です。

新羅明神は園城寺開祖、智証大師円珍(814-891)が中国(唐)からの帰国にさいし、加護を受けた異国の神です。園城寺の『寺門伝記補録』卷一によりますと、858年6月、大師が帰途についた海上で、風雨が強まり、船が激浪にもてあそばれていた際に、その姿を現します。伝えによると、素髪の翁が船中にあらわれ、大師に対し、私は新羅國の神で、あなたの教法を守り、弥勤菩薩がこの世にあらわれるまで、あなたのそばにとどまって守りつけましょうといいます。

新羅明神はその後、智証大師が中国から請來した1,000巻のお経を保管するのは比叡山上よりも現在の園城寺(三井寺)の地がよいと主張します。新羅明神は山門と寺門、つまり比叡山延暦寺と園城寺がたびたび争った時代に園城寺側の護法神として強く意識された神であります。

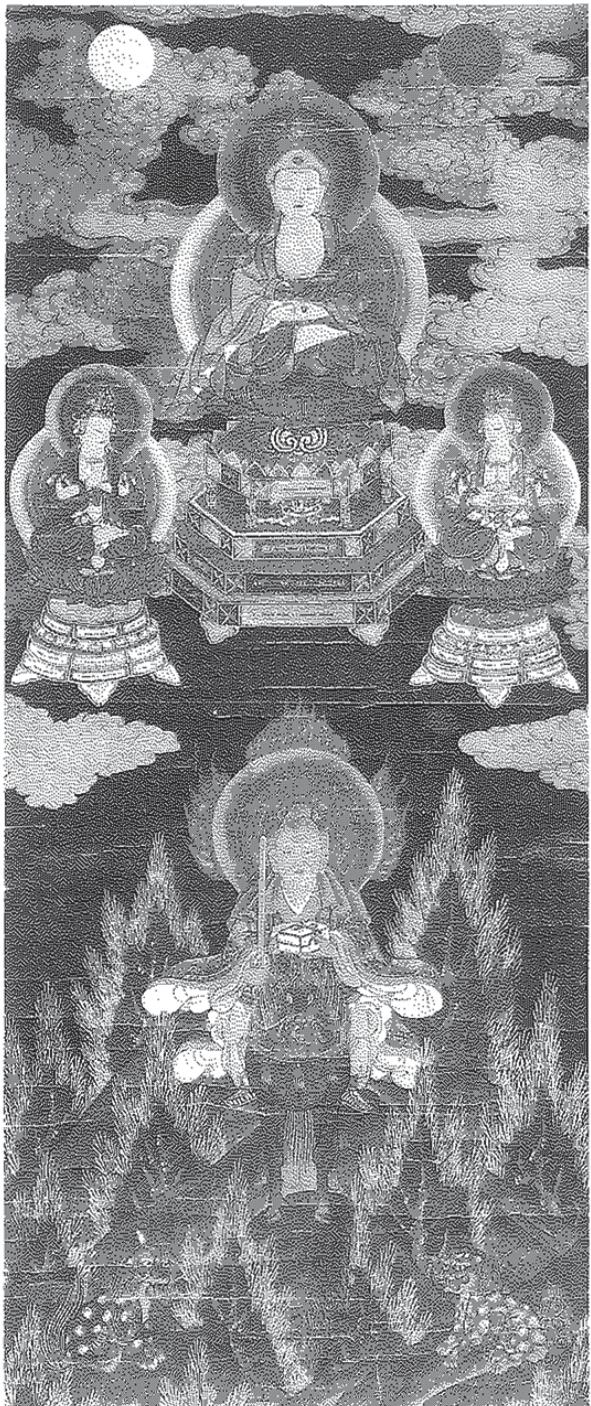
新羅明神はまた、永承6年(1051)に源頼義が前9年の役の出陣に際し、この神の前で戦勝を祈願した事から、源氏との関係も深い神となります。頼義の子供であります義光がこの神の前で元服し、新羅三郎義光と名のつ



重要文化財絹本着色新羅明神像 86.5×39.1  
鎌倉時代(大津市 園城寺)

たことは有名な話です。伝えられるところによると、頼義、義光父子は晩年をこの地の辺で過したとされます。その後、新羅明神をまつる、園城寺と源氏の関係は深いものとなっていきます。園城寺には国宝の新羅神坐像(木彫)が秘蔵されていますが、画像としては県内に南北朝から室町時代にかけて制作されたものも伝えられています。

天台系の護法神として山門派の祖慈覚大師円仁(794-846)により中国から勧請された



絹本着色多賀曼荼羅図 85.0×35.2  
江戸時代（多賀町 多賀大社）

とされ赤山明神や摩多羅神の画像もつたえられていますが、いずれも江戸時代の画像しか伝えられていません。しかし、近江ゆかりの神像画としては大切なと考えられます。

中世期の古い遺品はありませんが、近江の神像画として注目されるものに多賀曼荼羅があります。

多賀曼荼羅は基本的には山王曼荼羅と同じ

ように神仏習合思想にささえられ、垂迹形式の曼荼羅図のかたちで描かれています。

多賀大社の祭神は伊邪那岐命・伊邪那美命の夫婦神をまつります。社伝によればその昔伊邪那岐命が多賀宮に降臨する途中、杉坂（現犬上郡多賀町栗栖）で老夫に会い、老夫が栗飯を柏葉に清め進めたところ、命は老夫の志を愛でて、御箸を地上に挿したが、後に成長して大杉の神木になったとされています。もともとは杉坂が芹川上流に位置するところからも犬上郡一帯の水利を司る神として出発したものと考えられています。さて、それはともかくお多賀さんはお伊勢さんの親神さま、延命長寿の神として深く信仰されてきました。

現在伝えられる多賀曼荼羅は多賀講を中心に全国的に展開された信仰圏を多賀の神宮寺に所属していた坊人がお神札を配布してまわった折に、揚げて礼拝させたものと思われます。

写真に示した図は多賀明神の本地仏であります阿弥陀如来と觀音、勢至の両菩薩を上部に、下部には杉坂を背に馬上の多賀明神を神影像で描いています。明神には一对の狛犬を配しています。最上部の両端に日輪と月輪も描かれています。ほかに日輪と月輪を上部に描いて、黒馬に乗る神影を大きく描いた画像もあります。いずれも、庶民信仰にささえられた近江に伝えられる神像画として注目されるものです。

近江の神像画の主なものとして、山王曼荼羅、新羅明神像、多賀曼荼羅図について見てきましたが、神像画というわけではありませんが重要文化財に指定されている石山寺縁起巻1の最初に描かれている、比良明神の像なども、近江の神の姿を捉えたものとして重要なものと考えられます。

#### 滋賀文化財教室シリーズ No.152号

発行年月日 1995年3月31日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525